

書評03

暉峻 衆三 著

『わが農業問題研究の軌跡 ～資本主義から社会主義への模索』

御茶の水書房／2013 年 11 月刊／294 ページ／4,800 円＋税
ISBN 978-4-275-01052-0

評者：庄司 俊作
同志社大学人文科学研究所教授



優れた研究者が自分の研究とともに人生を振り返った著作が出版されている。本書もその1冊であるが、筆者の暉峻衆三氏は著名な農業経済学者。本書刊行時の年齢は89歳と5カ月というから驚く。文章にも力があり、衰えの影は全く見受けられない。どの分野でも、20～25年を1世代として各世代平均2～3人を押さえておけば基本的な研究動向は分かるというのが評者の勝手な考え方である。そうした者には、重要な学説がその形成史とともに一読して知れることがこの手の本の第1の効用である。だが、これは同業者にとってだけの話。本誌の多くの一般読者にとっては、ますます縁遠くなった農業問題の、日本の150年を縦断し、また世界を横断する諸相を著者の個人史と絡めて捉えなおすことに意味があると考え、その参考になることをいくつか指摘しておきたい。本書は平易な叙述の中に一筋の芯（思想）が通っている。一筋の芯とは、どの問題にも現実（歴史と現状）を正しく捉え、変革の課題と方向を明らかにするという研究姿勢が一貫していることである。その点で本書は著者の真面目さも反映して、薫風かおる出来栄えといってよく、読者の期待にも十分応えられる中身となっている。

本書を読んで次に驚かされるのは、その華麗な人脈である。著者の学問形成の時期だけに限定しても、東大農学部の大看板、東畑精一と近藤康男、「講座派」の山田盛太郎、そして「宇野経済学」の宇野弘蔵。加え、父が労働科学の

創始者である暉峻義等。いずれも日本の社会科学の誕生を主導した泰斗である。少し若い年代では農業史家の古島敏雄と、戦後のマルクス経済学を中心であった大内力。敗戦直後、古島をリーダーとする「山村の構造グループ」に入り、ここで農村調査を通して、後に著名な研究者となる多くの法学者・歴史学者・社会学者と出会う。著者の学問形成に最も大きな影響を与えたのは大内ではなかったか。こうした偉人たちの学問と人物像について簡にして要を得たまとめがよい。著者には学生時代に教えを受け、以来長くお付き合いいただいているが、こうした面でも有能であることをあらためて気づかされた。本書は農業経済学を中心とした経済学のすぐれた学説史でもある。

本書巻末の著作目録に見るように著者の研究は広範多岐にわたるが、何といっても日本資本主義と農業問題150年の展開を明らかにしたことが代表的研究である。これは斯界における金字塔といってよい。そのうち最初の著作、明治維新から1920年代までの時期が対象にされた『日本農業問題の展開上』（東京大学出版会、1970年）では、相対立する山田盛太郎と大内力の両説を批判し、独自の「日本資本主義の農業問題」のとらえ方を提示した。良くも悪しくも日本資本主義論争の影響を強く受け、その克服が課題となっていた当時の学術の世界では誰かがその役回りを果たさなければならなかった。筆者はそれに挑戦し、成功した。成功の要

素を3点あげれば、第1に、資本蓄積の視点から「日本資本主義の農業問題」を歴史の動態論として展開した。山田、大内の研究について、「論のたて方が正反対の両者が共に、戦前期の日本資本主義の構造を固定的に説いている」と著者は述べている（220頁）。第2に、労働市場を介した農家労働力のあり方、農民の主体形成を明らかにし、それを軸に農業問題の展開を論じた。当時、大内らによって活発に議論された農産物価格論を独自に歴史的概念として精緻化し、現実の分析に適用したものといえる。第3に、法制度と実態を区別して歴史の変化を見ようとした。これは親交のあった渡辺洋三ら法社会学者の影響がうかがわれる。このように、最良の研究成果が著者の中に流れ込み、著者によって総合され、「日本資本主義の農業問題」の独自の体系的理解が生み出された。ここには学問の正しい継承発展が見られる。華麗な人脈も生かされた。下巻を含め同書で提示された見解は、今や常識となり、その意味で古典となつて、後に続く研究の礎石として私たちの前にある。「日本資本主義の農業問題」の通史は、同書で完成したといえる。しかし、その叙述は一般読者には難解である。本書において、戦後現在までの約60年間の歴史も加え、150年の「日本資本主義の農業問題」論の概要が新たにまとめられた。これによって、著者の個人史と関連させて、広く市民に暉峻学説の理解が進むものと期待される。この点にも本書の意義を見たい。

著者の研究は広範多岐にわたると述べた。その中で、先進資本主義国の経済と農業、および「社会主義体制」の農業問題の研究がとくに重要である。前者に関しては特別に先進資本主義国農業論としてまとめられた論稿、後者に関しては中心となつてまとめた『ユーゴ社会主義の実像』（リベルタ出版、1990年）が取り上げられている。外国農業、とりわけ先進資本主義国や「社会主義国」の農業に対する関心も強く、精力的に海外調査をこなし、前者についてはイ

ギリスやフランス、アメリカ、後者に関しては旧ソ連等の調査報告がまとめられた。本誌の前身、『協う』にも「クリントンとカストロ—ジュネーブでのWTO閣僚会議」を寄せている（同第46号、1998年8月）。どれも興味深い内容で、ジャーナリストの才能もあるのではないかなと思わせるものが多いが、本書では内容的な言及はなく、残念である。好奇心の強さとともに、日本農業の課題と方向を見定めたいという思いが筆者をかり立てたといえる。日本農業の研究も同様であるが、資本主義や社会主義の経済体制との関連で農業を見ようとする姿勢が一貫している。これは、著者が同時にマルクス等の農業理論の研究を行い、社会主義や社会民主主義について重要な発言を行い、現在マルクスの共同体論の再検討に向かう原動力ではないか。

著者の個人史にはほとんど触れることができなかった。著者は戦中派である。戦前の軍国主義、そして戦争体験が人間の人格形成、学問形成に影響を与えることを実感させる文書が綴られている。東京教育大学の紛争に関する文章からは、現在の大学のあり方を考えるうえであの闘争を振り返ることが重要であると感ずるとともに、同志のひとりであった家永三郎の著書『東京教育大学文学部』を評し、「『本書』には敗北の精神的『腐り』は微塵もない。あるのは逆に、苦闘のもとで追求しつづけた大学のあるべき理念に対する家永の確固たる自負だ」と述べていることに感動した（243頁）。それは著者の精神的ありようでもなかったか。著者の母親文（ふみ）の「死にゆく」姿もただ静謐で、品格の高さを漂わせてよい。大原孫三郎や山川均、暉峻義等と労働科学研究所、作物栽培学者川田信一郎との交流など、どの逸話もさすががしく、初夏のさわやかな風のかおりがする。